ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.13 No.9 September 2012

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

9

CONTENTS

- 巻頭言
  オリンピックと２代真柱
  ／深谷忠一 1
- 天理教海外伝道の資料（31）
  満州伝道関連史料⑮
  ／深川治道 2
- 天理教伝道史の諸相（９）
  四国の天理教
  ／早田一郎 3
- 「おふでさき」の有機的展開（５）
  「おふでさき」第一号：第七首～第九首
  ／深谷耕治 4
- 「いのち」をつなぐ―生死の現象（９）
  死をどうしたら受けとめられるのか⑦
  ／堀内みどり 5
- 福島第１原発の放射能漏れ事故がもたらした想定外？の波紋（５）
  魚介類においての放射能汚染と除染問題
  ／佐藤孝則 6
- 現代世界に生きる「人間」と「宗教」（６）
  計算する機械と人間―チューリングテスト―
  ／岡田正彦 8
- ノーマライゼーションへの道程（７）
  海外福祉事情：デンマーク②
  ／八木三郎 9
- English Summary 10
- おやさと研究所ニュース 11
  体育学部に移管された天理スポーツ・オリンピック研究室の再出発 ①／第 250 回研究報告会

巻頭言

オリンピックと２代真柱

おやさと研究所長　深谷忠一　*Chuichi Fukaya*

柔道とバレーボールが東京オリンピックで正式種目になったのは、IOC 会長、アベリー・ブランデージと懇意にされていた中山正善２代真柱が、1960 年にローマで開催された夏季オリンピック視察員、また 1961 年６月の訪欧柔道親善使節団員としてヨーロッパに足を運ばれ、柔道とバレーボールを東京オリンピックの正式種目にすべく尽力されたお陰です。

東京オリンピックの時の柔道は男子の４階級。当然日本人が金メダルを独占すると国民の誰もが思っていました。しかし、１万５千人の大観衆がつめかけた日本武道館での試合で、軽量級、中量級、重量級の３選手は予想通り金メダルを獲得しましたが、体重無差別のクラスでは、日本の代表選手がオランダの巨人アントン・J. ヘーシンク選手に予選で負け、敗者復活戦を勝ち抜いて出た決勝戦でも、再び同選手に、袈裟固めで抑え込まれたのです。自他共に柔道は「日本のお家芸」とされ、「柔よく剛を制す」が柔道の真髄だと思われていた時代ですから、無差別級の日本選手の敗退は、武道館内だけでなく日本中のテレビ観戦者がシーンとなる衝撃でした。

この東京オリンピックに先立つ 1953 年、２代真柱は天理大学に柔道部を創設され、その初代師範として、第１回全日本柔道選手権大会の覇者松本安市七段を招かれました。そして、その松本師範の天理でのスパルタ教育によって才能を開花したのがヘーシンク選手だったのです。彼が決勝戦で勝った直後に、日本チームの松本監督のそばに駆け寄って最初に発した言葉が「先生、すみません」であり、自分が獲得した金メダルを「日本の４つ目の金メダルだ」と言ったのは有名な話ですが、松本師範が、柔道が正式種目になった初めてのオリンピック、しかも、その地元開催時の日本代表監督を務めながら、日本選手に立ちはだかる最強の外国人柔道家を育てるという奇跡をなしえたのは、２代真柱の確たる後ろ盾、何者をも隔てない親心があったからでした。

ヘーシンクは後に、「東京オリンピックで日本人が優勝していたら柔道は地方のスポーツと見做され、1972 年オリンピックの正式種目となることはなかっただろう」と言っていますが、２代真柱が、柔道のオリンピック種目化に尽力されただけでなく、長年にわたって外国の有力選手や指導者の応援をされたことが、今日、日本の柔道が世界 200 カ国に普及する礎になったのです。

また、東京オリンピックのバレーボールでは、東洋の魔女といわれた日本の女子選手が活躍しました。当時の日本では、テニスや卓球が女子の球技として認知されていたくらいで、女子が思いっきり跳んだり転んだりしてバレーボールをするなどは考えられない時代でした。その時に、鬼の大松といわれた監督の地獄の特訓のもと、独自にあみ出した回転レシーブを駆使して、日本の女子チームがソ連を破って金メダルを獲得。それで日本中が歓喜の渦に巻き込まれ、その渦が世界に広まって、多くの国の女性がバレーボールでオリンピックを目指すようになりました。また、その結果として、他の多くの競技が、オリンピックの女子種目に採用されるようになったのです。

2012 年ロンドンオリンピックは、女性選手が参加 204 全ての国・地域から集まり、全競技に挑んだ史上初の大会であり、また、初めて柔道男子の全ての金メダルが、日本人以外の選手に渡った大会でした。

つまり、今回のオリンピックは、東京大会の時に２代真柱が、「勝負を論ずれば、勝者は１種目１人。しかし、勝ち負けより各々が与わった徳分を十分に発揮することがより大切である」と言われたこと、また、オリンピック憲章の中で「すべての個人はいかなる種類の差別もなく、オリンピック精神によりスポーツを行う機会を与えられなければならず…」と謳われているところが、文字通りに実現した大会でした。

このロンドンオリンピックで実現した「誰もが参加でき、誰もが勝者になれる」という素晴らしい成果が、スタジアムの外の世界にも広がって、性別や肌の色の違い、宗教・宗派、民族、国家、思想・信条の違いを超えて、皆が肩を組み踊りながら行進できる世界が現出することを願う次第です。